

未来を創る

青葉区地域振興課 平成9年入庁
越路浩也

となのである。では、そのために何が課題なのだろうか。

意思の統一—これは「テーマ」「コンセプト」「戦略」と言い換えることもできるだろう。あるべき姿を設定し、一人一人がこれに向かって進んでいく。「目標なら「ゆめはま2010プラン」がある」と言われそうだが、「都市を整備する」のではなく、「組織が自己改革、進化していく」という意味での目標である。考え方、行動の拠り所となるものである。

情報の共有化—「横の連携の強化」といつてもいいだろう。内容の似た事業を異なる部署で実施していたが、担当者同士はそのことを知らなかったという経験はないだろうか。また「特定の部署にしかわからないことを減らす」作業も必要だ。

明快な組織構造—私が携わっている仕事の中にも、三つの部署（団体）が分担しているものがある。「こちらが担当だと聞いたのに、どうしてわからないんですか」と言われると「すいません、私もどうしてこうなのかわからないんです」と答えたくなる。住民から見れば、役所

の組織はわかりにくい。「情報の共有化、横の連携の強化」により改善できるはずだ。

人事制度の改善—例えば「異動が年に一度で年度途中の欠員は補充されない」「公平」な評価による労働意欲の増進が必要等が課題としてあげられる。「企業は人」とよく言われるが、自治体も職員という個人の総体である。一人一人にかかっているのだ。

お金—「コスト意識」という言葉をよく耳にする。単なる節約ではなく、必要なところにお金を使い、不必要なお金を使わないことである。一番いい方法は「予算使い切り」をやめることだ。現制度では無駄が多いのは誰もが認めることであり、将来的には実現しなければならぬ。一度、貸借対照表と損益計算書、さらに外郭団体もあわせて連結決算を見てみたい。

「行政は最大のサービス業」と新採用研修の時に聞いた。このことを常に念頭に置き「横浜の未来」を創りあげていかなければならない。そのために何が必要なのか、一人一人が考えて行動するときに来ている。

あとがき

ベイスターズ優勝の瞬間、街が揺れたと感じたのは私だけだろうか。あの熱狂が教えてくれたのは、「街の活力」は理論からは生まれにくいのだということだった。理屈抜きでワクワクできる何かを持つことができれば、人は元気に生きていける。

そう、「街の活力」の本質は案外単純なことなのだ。

今回の特集テーマ「創造的コンベンション都市への道」の編集過程での多くの出会いもワクワクするものだった。

限らない行動力と緻密な戦略、さらにそれらを裏付けるために積み重ねられる研究。実践者のみが語れる魅力ある街づくりの神髄がそこにはあった。

なによりもエネルギーそのものを創出しようとする人々は、その存在自体が理屈抜きでおもしろい。

「まずは行動し、横浜をおもしろい街にしようよ」という有形無形のメッセージを両手に抱えきれない位いただいた気がする。

これらの人々が実践の中で体

得した「創造的コンベンション都市」の本質を、読者のみなさんに生きた言葉で理解していただきたいと思いい、本号ではあえて従来の調査季報とは構成・文体等を異にするものを数多く取り入れた。溢れんばかりのエネルギーを五感で受けとめていただければ幸いである。

今年も間もなく終わろうとしている。新年とすぐそこまで来ている新世紀をワクワクしながら迎えるためにも、横浜を元気で思わず行ってみたくなる街にするためにも、行政職員よ、まずは書を捨てて街に出よう！

（重内）

「調査季報」は職員が自由に意見を発表し討論する行政研究誌です。「自主研究レポート」への投稿をお待ちしています。

応募される方は、事前に研究の概要をA4紙三枚以内にとまとめて企画局政策部調査課までお送りください。

FAX 六六三一四六一三
お問い合わせは、
電話 六七一一二〇二九

●第133号（一九九八年三月）

特集・転換期の行政運営システム

座談会・行政運営システムの展望 実践からの発想

海老澤栄一・萩島尚之・鈴木 隆

—— 徳江雅彦・名和田是彦・林 泰義・南 学
パートナーシップ型行政とは何か 市民セクターと自治
体行政の新しい関わりを考える 山岡義典

地域まちづくりの進展と区行政の課題

①局と区におけるまちづくりの実践を踏まえて

前川 慎

②市民参加からパートナーシップの時代に

田中 修

区役所とパートナーシップ行政 インターフェイス機能
のあり方

—— パートナーシップ行政と地域まちづくりを考える会
分権型予算執行のしくみ 地域の個性を活かす
立花 正人

住民発意の対応とそのしくみ

①神戸市まちづくり条例のしくみ

濱田 有司

②震災ユートピアが生んだ三つのしくみ

小林 郁雄

自主研究レポート

①協働による（福祉の）まちづくり 条例制定の中で見
えてきたこと

—— 庁内連携による福祉のまちづくり研究グループ

②多職種による居住環境の改善支援の重要性について

—— 神奈川県自主研究グループ

調査&政策研究／市民が抱く横浜の都市イメージ

市民意識調査より

—— 関口昌幸

連載／オリエンティック招致活動に学ぶ② 招致活動に寄せ
られた市民の声

—— 牧野和敏

新鮮力／都市（みやこいち）

—— 原田直生

●第134号（一九九八年六月）

特集・総合的・地域開発のあり方

座談会・成熟社会の地域開発

—— 大村謙二郎・岸 由二・澤田誠二

新しい地域開発を考える際の視点と注意すべき諸点

—— 竹内佐和子・北村圭一・土井一成・南 学

事例から見る総合的・地域開発の概念と課題

①IBAエムシャーパーク（ドイツ）のコンセプトと運
営方法

—— 永松 栄

②流域からのまちづくり——マージ川流域キャンペーン
と鶴見川の流域活動

—— 大澤浩一

③大阪湾ベイエリアの環境保全創造に向けた取り組みの
現状と展望

—— 杉原五郎

成熟社会における総合的な地域開発の視点——横浜市の課
題から

①平成九年度政策立案基礎調査「成熟社会の新しい地域
開発」から

—— 編集部

②鶴見川総合治水対策の変遷と現況

—— 建設省京浜工事事務所

③流域から考える水環境の保全・創造

—— 野村宜彦・山下雅雪

④成熟社会における地域産業活性化策について

—— 長谷川政男

⑤成熟社会の農的市民像

—— 江成卓史

⑥地域生活圏とその住民像に即した施策立案のために——
区における地域調査のあり方を考える

—— 松岡文和

⑦横浜「丘の手」における住民からの地域まちづくり展
望

—— 福富洋一郎

調査&政策研究／平成九年度横浜市市民アンケート調査
から

—— 石原雅久

新鮮力／市民に鍛えられる日々

—— 田並 静

●第135号（一九九八年九月）

特集・京浜臨海部再編整備

I世界に開かれた海上産業都市づくり

市長インタビュー・産業活性化は福祉基盤を支える柱

—— 高秀秀信

座談会・京浜臨海部の課題とこれからの可能性

—— 小島謙一・岩宮 浩・内藤 理

—— 金近忠彦・横山 悠・南 学

京浜臨海部と浅野総一郎 先人たちの遺産

—— 東 秀紀

産業集積と活性化戦略

①日本技術を支える産業集積と活性化 拠点的母工場と
しての取り組み

—— 柏木孝之

②京浜臨海部の現況データ

—— 山田孝一

21世紀の新産業の創出

①横浜における地域科学技術政策の展開

—— 山本 治・塩田 進

②これからのインキュベータのあり方

—— 星野 敏

II京浜臨海部再編整備に向けての実践

—— 京浜地域ランドデザイン視点

—— 土井一成

地域再生への取り組み

—— 京浜臨海部再編整備マスタープ
ランを中心に

—— 鈴木健一・前川 稔・
小金井健至・山形珠実

産学連携を中心とする研究開発拠点の実現

—— 金子延康・山田孝一・菅原真一郎

市民に開かれた京浜臨海部

—— 長谷川政男・関戸義仁

①鶴見区における臨海部の現状と課題

—— 橋本 勝

②神奈川県臨海部の特色とまちづくりの課題

—— 自主研究レポート／地方分権の憲法上の課題について

—— 松山弘子

水道行政をモデルとして

—— 南 有里

新鮮力／すべては制度を「知る」ことから

—— 植崎和雄

調査季報

136

1998年12月

編集・発行

横浜市企画局政策部調査課

〒231-0017 横浜市中区港町1-1

TEL.045-671-2029

1998年12月25日発行

横浜市広報印刷物登録
第090134号

類別・分類 A-BA011

デザイン サウスピア

印刷 東邦印刷株式会社

ISSN0387-8899

この印刷物は再生紙（古紙混入率70%）を使用しています